

□被災から学び得たもの

～明日への希望として～

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合
消防本部 畠山 光

1. はじめに

私の住んでいる気仙沼市は、三陸海岸特有のリアス式海岸の湾奥に、波の静かな美しい良港を擁していました。海は漁業や養殖業など豊かな恵みを与えてくれました。

私の自宅があった二ノ浜地区も入り江に小さな集落を形成しており、自宅も庭に小舟をつけられるほど海の近くにありました。

3月11日、私は非番で自宅にいました。津波で地区は壊滅状態になり、海岸線に一本あるだけの道路も寸断され、避難所に指定されている浦島小学校は孤立しました。さらに、気仙沼湾一帯の火災により、一晩中黒煙に包まれました。

その中で私が被災して実際に体験したこと、感じたことを記していきます。

2. 地震と津波、自助と共助

14時46分、突然の強烈な縦揺れに、「この地震では家が倒壊する」という恐怖を感じました。驚いている母を屋外に押し出し、2人で庭に四つ這いになると、まもなく強い横揺れが始まり、隣の家は地面に沈み、自宅にもひびが入りました。「とうとう宮城県沖地震が来た」と思い、次にすべきことを考えながら、ひたすら地震がおさまるのを待ちました。揺れが小さくなったので、「津波がく

るぞ!!逃げろよ!!」と地区全域に届くように、何度も何度も叫びました。庭先の湾を見ると、すでに水がすごい勢いで引いていました。

私は、津波到達までに海岸道路を抜けられないと思い、消防署へ向かうのを諦め、避難行動に移りました。いろいろな荷物をまとめようとしたが、「津波にみんなくれてやれ」と思い直し、必要最低限の物を持ち、車も諦め、800m先の避難所へ向かうことにしました。

家を出る頃、6mの大津波警報が発令されたと同報防災行政無線で知りました。庭を出ると、私の声で怖くなったと、近所の人々が避難を始めていました。私は足の不自由なお年寄りを背負ったり、津波の情報を分からないお年寄りを家から出したり、高台中腹まで何往復かしました。健康な人には、手分けをして近所を確認するように頼みました。

自宅にあったリヤカーにお年寄りを乗せて、歩ける人に高台へ引っ張って行くように頼んだりもしました。「もっともっと高台へあがれ!!」と声を張り、とにかく高く、海岸から遠くへ避難させました。

自宅へ戻ろうとする車も、水門を閉めようと戻ってきた消防団員にも、「とにかく命が優先だ」と言い高台へ避難させ、最後に自転車で避難所へ向かいました。声がけができた家は十数件が限界でした。

途中、対岸の商港岸壁の海面が徐々に上がっていくのが見えました。津波が防潮堤を超えると、一気に海水がなだれ込み、危険物のタンクが次々と倒れ、流されていきました。

「何とか生き延びた」と思う反面、鹿折地区で仕事上の妻、南郷地区の幼稚園にいる次男・三男を、今津波が襲っていると思うと、不安で押しつぶされそうになりました。

学校に到着すると、下校前だった長男と、別々に避難した母がいてとりあえずほっとしました。

まずは自治会長に地区の避難者、未確認者をまとめてもらい、学校長などと避難所物品の確認をしました。強い余震が続いたので、建物の中は危険だと思い、校庭にテントを張って過ごすことにしました。電話は通じませんでしたが、メールができたので、家族の無事を確認することができました。消防本部には参集できない事と避難所の状況をメールしました。

3. 火災と黒煙と消火作業

夕方に雪が降り、2、3cm 積もりました。

避難所には様々な業種の地区民がいて、それぞれ救護班などの役割ができあがっていきました。

17時40分頃、高齢者2人が高台に取り残されていたので、7人で救出に向かいました。

1人を担架に乗せたところ、目の前で爆発音とともに黒いきのご雲が現れ、黒煙は急速に大きく

なりました。私達は身の危険を感じ、もう1人を私が背負い、死ぬ気で避難所へ走りました。まもなく、木々に囲まれた避難所は轟音と火の粉にさらされることになりました。

火の勢いが増すと、急に強烈な風が起きました。飛ばされそうになるテントをたたみ、燃えやすいものは安全な場所に離し、子供達には防災の非常用毛布かぶせ、校庭の真ん中でじっとさせました。厚い煙と熱気で2m先が見えず、呼吸も思うようにできず、「これは、死んだな」と絶望しました。

消防本部に状況を伝えましたが、孤立した避難所は、熾烈な火災になすすべもなく、運に任せるしかありませんでした。

それでも、プールがあったので、軽トラックに水槽を積んで、移動水槽車にして、なんとか水バケツで消火を続けました。

夜にはメールもできなくなりました。携帯電話のテレビで、気仙沼湾一帯が火の海になっている映像が流れ、「津波で助かったのに今度は火災か」と何ともいえない怒りを感じました。幸い浦島小学校付近の火災は21時になると落ち着いてきました。皆で火災の前に積もった雪が、飛び火を防いでくれたのではないかと話しました。

子供とお年寄りも、最近耐震補強したばかりの教室で寝ることにしました。避難者数に対して毛布が少なかったため、毛布の包装ビニールやカーテンなどを利用して寒さを凌ぎました。子供達は震えていて、季節外れの寒さを恨みました。



炎上する気仙沼湾



押し寄せる津波で炎上し拡大してゆく火災

気仙沼湾を見ると、燃えたがれきが津波で行き来して、まるで地獄絵図を見ているようでした。

対岸では一晩中サイレンが鳴り響き、何もできない自分を悔しく思いました。

4. 山越え

12日、日の出前に対策班のミーティングを行いました。夜明けとともに偵察機が飛ぶと考え、校庭に「200人・水食料なし・毛布不足」と情報を書きました。沢水で備蓄米を炊き、食事をとることもできました。

そんな中、生存者2名が漁港で発見されました。津波にのまれたものの、小船に這い上がり、一晩中燃えさかる湾内をさまよっていたようで、体は冷たく、ケガも深く、ほかの地区の状況も厳しい事が容易に分かりました。

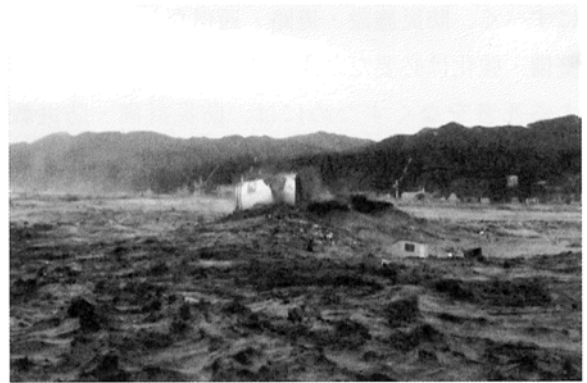
集落を見渡せる高台にも行きましたが、自宅があった場所は、すべてが津波にさらわれて、がれきすらありませんでした。

9時頃には大津波警報が解除になり、火災も落ち着いたので、徒歩で山越えをし、消防署へ向かうことに決めました。

沿岸部は津波と火災で壊滅状態でした。道路はがれきで埋め尽くされていました。それでも、対岸の避難ビルに取り残された人がヘリで救助されていて、救助の手が差し伸べられているのを希望に感じ、何度も何度も山を越えました。口の渇きは沢水をわずかに含んで凌ぎました。

生存者がいれば、被災状況や避難者数など情報収集をしながら、ひたすら歩きました。食事をとれていない人におにぎりをあげたり、水などを恵んでもらったり、5時間かけて山を越えました。しかし、鹿折地区も津波と火災で変わり果てていました。

鹿折大橋に出ると、自衛隊や緊急消防援助隊の車列があり、「このような応援があれば何とかな



る」と、被災者として非常に頼もしく感じたのを覚えています。

消防隊と合流して、参集途上で知りえた情報を災害対策本部へ伝えました。

24時間後に参集を果たした私は、そのまま現場活動を志願しました。ここから、私の消防士としての震災との戦いが始まりました。

5. 被災して感じたことと今後の課題

今回の経験で感じたことは、津波に対しての自助の重要性と共助の難しさ。そして、公助の限界でした。

まず、津波に対しては、避難行動を早く起こせるかが最も重要でした。

そして、今回は最大波の到達まで時間があったために行えた事も多く、私達の地区はコミュニティーによる避難行動で、より多くの方が助かりました。しかし、私は津波に巻き込まれるのではないかという恐怖を常に感じながら活動しました。このように、津波に関しての共助は、共倒れになる危険性もあるため、自力避難困難者のサポートなど課題も多いと思います。

津波浸水域の多くの避難所は、津波の直後から孤立しました。アクセスやネットワークも途絶し、公助の手が届けられず、数日間何とか凌いで生活していた避難所もありました。

今後も、津波災害が起きた場合に被害を最小限

にすべく、防災施設・道路・通信などハード面の整備・強化は必要だと思います。しかし、津波による死者をなくすためには、防災計画・防災教育・自主防災組織などのソフト面の検証・強化が必須だと思います。

今回の震災から得た教訓を必ず生かすため、ゼロベースからの見直しも含め、私たちの責務はより重要になっています。

